

日本語の呼びかけ語の語用論的機能とポライトネス ： 日露対照研究を通して

東出, 朋

<https://doi.org/10.15017/1931985>

出版情報 : Kyushu University, 2017, 博士 (学術), 課程博士
バージョン :
権利関係 :

氏 名 : 東出 朋

論 文 名 : 日本語の呼びかけ語の語用論的機能とポライトネス—日露対照研究を通して—

区 分 : 甲

論 文 内 容 の 要 旨

本研究は、日本語の呼びかけ語の基礎的研究として、自然談話を主なデータとして呼びかけ語の多様な現れを考察したものである。その根底にあるのは、呼びかけ語が言語運用においては基本的な要素であるのに反して言語体系の中では周辺に位置し、研究においても教育においても軽視されてきた対象であるという事実がある。従来日本語の呼びかけ語は文法的観点また社会言語学的観点から個別に研究されてきたが、本研究は、より言語運用の視点を取り入れ包括的な呼びかけ語研究を目指した。

第1章では本研究の背景を述べ、目的と課題、データ、及び理論的枠組を設定した。第2章では日本語の呼びかけ語の先行研究を概観し、話し言葉に顕著な無助詞現象やハとの機能的近接性という根本的問題を検討した上で、「話し手が聞き手を指して述べた無助詞の名詞(句)全て」を呼びかけ語と定義し、この定義の妥当性について検証した。呼びかけ語は「統語的遊離性」という文法的特徴によって発話に位置づけられ、ハでもガでも表せない方法で聞き手を当該発話と結びつけている。

第3章以降が本論である。第3章では、日本語の呼びかけ語の多様な用法について分析した。主な議論の対象は、「千代さんあんた、気いふれたのか」に見られるような、対称名詞と対称人称詞を二つ重ねて用いる用法(重ね用法)の統語的条件及び語用論的条件を分析した。この用法が選択される背景には、話し手が持つ想定と現実のずれが存在する。このような有標な形式は、他の可能な形式との比較を経た上で選択されている。つまり、重ね用法(千代さんあんた)と範列関係にある対称詞単独(千代さん)、対称人称詞単独(あんた)の三択の中から、話し手は瞬間的に対称人称詞が持つ指示性と評価性を査定して選択していることを、母語話者へのアンケートを通じて明らかにした。もう一つの主な分析点は、対称人称詞のフィルター的な用法である。老人の語りにはしばしば観察される「あんた」は、聞き手そのものを呼んでいるわけではなく、聞き手をその発話場に引き込んで発話を共有したいという話し手の積極的な態度が言語化されたものである。最後に、自然談話で観察される多様な呼びかけ語の用法について、「対聞き手指向性」という観点から統一的な説明を行った。

呼びかけ語は話し手と聞き手の人間関係を繊細に反映する要素である。第4章では、コミュニケーションと人間関係を同時に分析する方法論「ポライトネス理論」を援用して日本語とロシア語の呼びかけ語について対照した。その結果、日本語では話し手は呼びかけ語の形式を主体的に選択することはできないが、主体的な付加によって発話行為を際立たせ、また当該発話の字義以上の解釈を可能にもしているのに対し、ロシア語では話し手の主体的かつ柔軟な語彙選択が際立っており、また対立場面において呼びかけ語が積極的に使用される。日本語、ロシア語ともに、呼びかけ語で聞き手に対する配慮を行っているのだが、日本語では緊張感の緩和を、ロシア語では聞き手への誠意・熱意の伝達を目指しているという違いがある。ポライトネスの二側面「ポリション(働きかけ: 意図的ポライトネス) / ディサーンメント(わきまえ: 社会慣習的ポライトネス)」のうち、日本語

はディサーンメントが基盤であるのに対しロシア語はポリションの要素が強いという特徴を持っているが、本研究で分析対象とした呼びかけ語も、それぞれの言語が有するポライトネス一般の特徴と合致している。

日露の呼びかけ語はともにポジティブ・ポライトネス・ストラテジーとして機能しているものの、その使用の幅に大きな差がある。5章では、4章までの分析を踏まえた上で、呼びかけ語指導に向けて、現存する問題点の考察を行った。現在の日本語教育においては、日本語の呼びかけ語は「いつ、どのような発話に伴って呼びかけ語を使うのか」学習者には明示的な伝達がなされていない。それに対しロシア語では「言葉遣い論 (Культура речи)」の学問の影響で呼びかけ語の語彙選択や典型的な付加の用法を教科書内で示す傾向がある。とは言え、ロシア語のポライトネスで特徴的である積極的なバリエーション選択や、人間関係を調整するための語彙等は「規範的」ではないために教科書で示されない傾向が観察された。前章までで記述した日本語とロシア語のポライトネスと関連させた呼びかけ語指導の必要性を論じた。

本研究は、特定のレベルにとどまらず包括的に呼びかけ語を研究することで、従来の呼びかけ語研究、さらに言語コミュニケーション研究に対して学問的貢献をもたらしたと言えるだろう。